宇野浩二全集

第五卷

宇野浩二全集

第五卷

宇野浩二全集　第五卷
定價一五〇〇圓
昭和四十七年八月十日印刷
昭和四十七年八月十九日發行
著者　宇野浩二
發行者　山越豐
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四
©一九七二　檢印廢止

宇野浩二全集　第五卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

十軒路地　七
従兄弟同志　三四
足りない人　五六
高天ケ原　九〇
出世五人男　一三七
「木から下りて來い」　二九一
あとがき　四一五

小說

五

十軒路地

大阪の宗右衛門町といふのは、道頓堀川に沿うた、日本橋から戎橋までの間の、北側の川沿ひの町をいふのである。私は少年の頃、この町に十年ばかり住んでゐたことがある。

何故、突然こんなことをいひ出したかといふと、つい近頃のことであるが、私は珍しい舊友から一通の手紙を受取つた。活版刷の書面で、××市カッフエー・サン・パウロといふのが差出人になつてゐて、暑中見舞の文句の後に、今度當店の店主山木宇三吉が××縣多額納税議員の互選資格者になつたといふ知らせなのである。一寸見ると、この手紙は私に全く不意のものだつた。何故といふのに、カッフエー・サン・パウロから手紙を貰つたことも、多額納税議員資格者の山木宇三吉から便りを受けたことも、私には全く生れて初めてのことだつたからだ。もつともカッフエー・サン・パウロの存在も、山木宇三吉の名前も私には初めてのものではない。現に數ケ月前、或雜誌社から『カッフエーの思出』といふ感想を求められた時、私はそのカッフエー・サン・パウロのことも、私の舊友山木宇三吉の思出と共に、文章に書いたことがあるのだ。考へて見ると、山木宇三吉は多分私のその文章を讀んで、私のことを思ひ出して、今度多額納税議員資格者になつたのを機會に、部下に命じてその披露の手紙を私のところへ寄遣したのだらうと思はれる。

かういつてしまふと、實も蓋もない話であるが、私はこれを機會に私の古い友人である山木宇三吉との交際を回想すると共に、その頃の私たちの場面であつた大阪の宗右衛門町といふ町に就いて書いて見ようと思立つた譯である。實際私は自分が十年餘も住んでゐたその一風變つた町のことを、どんな風にどういふ機會で書かうかと長い間考へてゐたものであつた。今、少し無理だが、山木宇三吉からの手紙をきつかけにして、彼や私が住んでゐた町の記憶を少しばかり書いて見ようと志した譯である。それにはしかし全然理由がないこともない、といふのは私が宗右衛門町に移つて來て最初に言葉を交したのが彼で、又最も親しくしたのも彼だからである。而も彼の家と私の家とは向ひ同士だつた。

十軒路地といふのは、當時彼の家や私の家が屬してゐた路地のことである。落合直文の辭書に依ると、路地といふのは

門内又は庭園の通路、或は市中の人家と人家との間の狹い通路といふ意味で、東京の言葉だとしてある。路地といふ言葉そのものゝ本來の意味はさうかも知れないが、私がこゝで使はうとする路地といふのは、東京の言葉といふよりは、最も大阪的な意味で使ふのである。だから、若しかすると『路地』と當てた字が間違つてゐるかも知れない。兎に角、私のこゝでいふ路地といふのは、大阪によくある特種な路地の長屋を指すのである。この言葉は大阪では訛つて『ろうぢ』といひ馴らしてゐる。それには袋路地もあれば、拔路地もあるが、大阪では前者の方が多い。特徴は『ことばのいづみ』の文句ではないが、門を持つてゐることである。門の中は大抵コンクリートか敷石の路になつてゐて、それを挾んで十軒なり、五軒なり、向ひ合つてゐたり、時としては片側だけだつたりして、何軒かの家が建つてゐる。つまり私がこゝで十軒路地と呼んだのは、門の中に二列に五軒づゝ並んだ、東京流にいふと十軒長屋のことなのである。その路地は南北に通つてゐたから、東西の側に五軒づゝの家が並んでゐて、私の家がその西側の三軒目で、山木字三吉の家が東側の三軒目だつた。路地とか長屋とかいふと、ひどく見すぼらしく聞えるが、宗右衞門町は貧民窟ではなく、所謂許可區域に屬する色町であつたから、五軒づゝ各々棟つゞきの長屋にはなつてゐたが、格子造りの背の高い二階建で、色町獨特の磨き込んだ家々だつた。

私がこの町に來て住むやうになつたのは、十歳かの春だつたと思ふ。それ迄は同じ大阪ではあるが、ずつと山の手の方に住んでゐた。それは大阪城の大手門通のすぐ隣の町だつたから、宗右衞門町が芝居とか見世物とか、料理屋とかお茶屋とかの町つゞきであるやうに、そこからは、五町と離れないところに城の馬場があり、馬場の周圍には歩兵聯隊とか、砲兵聯隊とか、衞戍病院とかゞあるといつた風な町だつた。私の通つてゐた陸軍偕行社附屬小學校といふのもその邊にあつた。この學校は風變りな學校だつた。入學させる生徒の資格に制限があつて、餘り貧乏な家庭の子弟は許されなかつた、主に軍人の子とか、でなければ二人以上の軍人の紹介がなければならなかつた。私の死んだ父は軍人ではなかつたし、寡婦の母は間もなく破産して、その爲に私が宗右衞門町の伯父の家に引取られた位であるから、餘り貧乏でなくもなかつたのだが、どういふ軍人の紹介で、私たち（私と兄）はそんな學校に入るやうになつたのか、私は知らない。東京でいふと、ちよつと曉星學校のやうな風で、あれより武骨だつたが、貴族的なところなどは似てゐた。まだ今日のやうに洋服の用ひられない頃であつたが、偕行社の生徒は七歳の尋常一年生から制服と制帽と、それに背嚢を負うて、雨の日は夏でも傘を許されないので、外套に頭巾を被つて行くのである。それが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

皆陸軍兵の樣式を眞似たものだつた。ズボンの脇には縱に赤い線が入つてゐて、上着の袖には山型の線が縫ひ込んであつた。帽子は、一般の學生帽に見る海軍型のでなく、陸軍型の桶のやうな恰好のであつた。そして背嚢も兵隊の持つてゐる通りの黃色い毛のついたのだつた。尋常一年の子供にかういふ服裝をさせなければならなかつたのだから、成程貧乏人の子は、向うから拒んだに違ひない。この學校の規則に、學校の制服を着てゐる時に、途で少尉以上の軍人に會ふと、兵隊と同じやうに擧手の敬禮をしなければならなかつた。その代り制服さへ着てゐたなら、聯隊でも、師團司令部のある城の天守臺へでも、門衞に擧手の敬禮をするだけで、どん〳〵入つて行くことが出來た。こちらは七歲や八歲の少年であつたから、將校に敬禮をして、向うから敬禮を返されるのは愉快であつたが、大人の將校たちは隨分迷惑なことだつたらうと思ふ。さういふ學校だつたから、敎師を呼ぶのに先生といはないで敎官殿と呼んだ。隨分古風な學校であるが、今でも存在してゐるといふことである。

軍人ぎらひの當節のことであるから、そんな古風な學校は多分止めになつたらう位に思つてゐたところが、これも亦つい近頃、山木宇三吉の消息のあつた半月ほど前に、私は名前を辛うじて思ひ出せるやうな古い友人からの手紙で、偕行社時代の同級生が東京に二十人近くゐるので、每年一回づゝ會合をしてゐる、近頃の君の消息が分つたので、今度通知した次第だ、是非出席してほしい云々といふ知らせを受取つた。して見ると、私が七歲から十歲まで同級だつた人々が二十人近く東京にゐて、每年一度づゝ會合をしてゐる譯である。同級といつても全體三四十人だつたと思ふ、それも大阪の小學校の同級である、それが二十五年經つて二十人近く集まつてゐるとは、さすがに東京は大都會だと私は感心した。偕行社の友人なら大抵軍人になつてゐるものが多いだらう、二十五年も會はない友人といふものはどの位變つてゐるだらう、手紙に書いてある名前を一々讀んで行くと、全然思ひ出せないのもあつたが、少しづゝ思ひ出せる顏や、或はその名前の少年と交際した日の記憶までだん〳〵よみがへつて來て、懷しくなつたので、私は指定された日に會場の鳥屋へ行つて見た。

彼等の顏を見た時も、前に名前を手紙で見た時と同じ現象が起つた。直に思ひ出した顏もあつたが、終まで思ひ出せない顏もあつた、話したり笑つたりしてゐるうちに次第に思ひ出した顏もあつた。中には名前も思ひ出せるし、その子の家へ遊びに行つたことさへ思ひ出せるし、その子の父の聯隊長が或日馬に乘つてゐたのを見た記憶さへあるのに、その名前の少年と現在その名前の大人とがどうしても一所に考へられないやうなのもあつた。十五六人ばかりの會合だつた。多くの人たちも私同樣に、軍人の子に限つてゐなかつたと見えて、

その中に軍人は三四人しかゐなかつた。もつとも軍人の子で外の者になつてゐたり、外の者の子で軍人になつてゐる者などあることはいふ迄もない。その時の話で、あの自分たちが二十五年前に通つた、不思議な古風な學校が今でもあるといふことを聞いたのである。

その偕行社の近くにあつた山の手の町の家は私の母の家だつたのだ。その私の母の家が立ち行かなくなつて、私は今いふ宗右衞門町の伯父の家に引取られることになつたのであるが、彼はその時まで未だ家をなしてゐなかつたので、その時初めて家を持つた譯なのである。彼は當時心齋橋通の或町で三人の從兄弟たちと共同で、羅紗と洋傘の卸賣を商賣にしてゐた。私の山の手の家があつた間は、彼は私の家から毎日その店の方へ通つてゐたのであるが、私の家がつぶれたのを機會に、私と祖母を引取つて、その宗右衞門町に借家することになつたのだ。何故彼が宗右衞門町などを選んで住む氣になつたのか知ることは出來ない。これ迄の山の手の私の家からも彼の店まで相當の道のりがあつたが、宗右衞門町からも同じ程の距離があつた。彼はそこから以前のやうに毎日心齋橋の店に通つた。彼はその時四十歳に近かつたが、獨身だつた。若年の頃清元節に凝つたのが始まりで、それに美貌だつたのが手傳つて、彼は茶屋遊びに身を持ちくづして、十年ばかり行方不明になつてゐたことがあつた。その間に何でも東京の方で妻も持ち、子もあつたといふ話を後に聞いたことがあるが、それ等との關係はどんな風になつてゐるのか、私は今も知らない。そして彼は三十五歳の時、ふらりと十年振りでその山の手にあつた私の母の家の玄關に姿を現したのである。彼を最初に見つけたのは私だつた。玄關に鈴の音がしたので、當時六七歳であつた私は、次の間で玩具でも持つて遊んでゐたのだらう、誰か來たと思つてちよこ〳〵と立つて見に行つた。私はそんな幼年であつたから、疊の上に立つてゐて、玄關の土間に立つてゐる見知ぬ人と同じ位の高さだつた。彼は片手に羅紗の小さな鞄を持つて丸い帽子（たしか茶色の山高帽子だつた）を被つてゐた。それが私の生れる前から行方不明になつてゐた伯父だつたのだ。彼はそれから三年餘り私の母の家に居候をしてゐた。そのうちに志を立てゝ、今いふ從兄弟たちと共同の商賣を始めて、だん〳〵成功したものだから、幸、私の家が立ち行かなくなつた時、彼が私たちを引取つてくれたのである。それが宗右衞門町の十軒路地だつたのだ。

この町へ引越してから間もなくの或日のことだつた。私は所在がなかつたのと、一體どういふ町だらうと思ふ好奇心とで、町に子供の出てゐない躙を見計らつて、一人でそつと家を出て見た。路地を出たところが宗右衞門町の通で、すぐ傍に日本橋があつた。日本橋の方は餘り人通りが賑か過ぎるの

で、私は反對に西へ向つて歩いて行つた。いや、初から私はそのつもりだつたのかも知れない。と云ふのは、家を出る時、小さな玩具の錨を懷中に忍ばせて來たからだつた。それは私が未だ山の手の自分の家にゐた時分から持つてゐたもので、本物の錨をそのまゝ小さくしたやうな形の玩具で、錨の端に長い紐がついてゐた。どういふ目的で造られたものか知らないが、前の家にゐた頃、私はよく近所の子供友達に連れられて、近くの掘割へ出かけて行つて、水の上に流れて來る藻を、こちらからその錨を投げつけることに依つて引つかけては、糸でたぐり寄せて採集する遊びに使つたものである。山の手の家の時には、東横堀川まで藻を取りに行くのは、道が遠かつたので一二度しか行かなかつたが、今度の家は直近くに道頓堀川があつたので、私はこゝへ引越して來てこの掘割を見た時、一番初に思ひついたのは、あの錨でこゝへ藻を釣りに來てやらうといふことだつた。但、内氣だつたので、未だ顔馴染でない近所の同年輩の友達に見られないやうに、一人でそつとその遊びに耽りたいと考へたのだつた。

私がこゝへ來た數年前に、宗右衛門町燒と呼ばれた大火があつた。どういふ譯だつたのか、さういふ色町にも拘らず、私が越して來た時分には、宗右衛門町の北側はすつかり家が建ち並んでゐたが、南側の道頓堀川に面してゐる方は、相合橋寄りの半町ばかりと、太左衛門橋と戎橋との間は燒跡のまゝに殘されて草が生えてゐた。それが川に面してゐる側であつたから、川の岸は往來よりずつと低くなつてゐたので、緩い傾斜をなした草の土手になつてゐた。だからこの側に建つてゐる家は往來の方から見ると二階建だが、川の方から見ると三階建になつてゐるのが常である。その燒跡の草原には、ところ〴〵に柳の木が繁つてゐたり、かと思ふと砂利が積んであつたり、そして柳の下には甘酒屋が荷を下ろしてゐて、車力が甘酒を飲んでゐたり、砂利の山では子供がいゝ遊び場にして、角力をとつたりしてゐた。それでゐて、往來を隔てた反對の側は一面にお茶屋が並んでゐるのである。それ等の家々はみな新築だから綺麗だつた。どの家にも入口には長方形の行燈が掛つてゐた。さうだ、未だ電燈のない時分だつた。

かういふ川岸のことを大阪では『濱』と呼んでゐる。その濱側には家の建つてゐるところと燒跡とに拘らず、半町目毎位に、往來から水際に下りて行く石段が造られてあつた。舟からの上り下りや、洗濯の便利のためであらう。私は外に見る人がないのを見定めると、懷中から玩具の錨を取出して、片手に錨を、他の手にそれを結びつけてある紐の端を持つて、藻は澤山流れて來るだらうか、これ迄の家から行つた横堀の川よりもあたりが賑かなせゐか、川幅が狹く見えるし、川の水が汚なく思はれるが、などと思ひながら、水際への石段を下りて行つた。ところが、私の失望にまで、そこには木切だ

とか、藻屑だとか、古下駄だとか、そんな不用なものが無數に流れて來るばかりで、肝腎の藻が少なかつた。稀に見出されても、新鮮な青い色をしてゐるのはなくて、大方黑味がゝつたのとか、茶色がゝつたのしか流れて來なかつた。それに以前の横堀の川だと、さうして水際に立つてゐると、あたりが靜かなので、世界が水の流と藻とだけにしか考へられなかつたが、こゝでは幾ら一心に流れて來る藻を探さうとしても、すぐ川向うの道頓堀の雜踏や、背中の往來を隔てたお茶屋に出入りする人の話聲やざわめきが耳について、いつの間にか藻をとることを忘れて、錨を手にしたまゝで私はぼんやり立つてゐる自分を見出さねばならなかつた。が、それではならぬと思つて、青い藻でも黑い藻でも、かまはず取る方針にして、いろ〳〵な埃の間に辛うじて見つけられる藻を目がけては、それを引つ掛けるために、錨を投げつけ投げつけしてゐた。すると、いつの間にか、少し一心になつてゐたと見えて、「何してなはんね？」と突然聲を掛けて近づいて來た者があつたのを、私は知らなかつた位だつた。その時、さういつて、私の傍に立つたのが、先にいつた山木宇三吉だつたのである。無論、その時は未だ宇三吉の名も、彼が私の越して來た伯父の家の、ま向ひの家の子だといふことも知らなかつた。

私は宇三吉に聲を掛けられたが、答へそびれて默つてゐた。で、彼も默つて、暫く私と並んだまゝ、立つて川の流れを見てゐた。

「前に何處に居なはつたんだす？」としばらくして彼の方から又尋ねた。彼の方では私が昨今越して來たものだと知つてゐたらしいのである。

「××町……」と私は答へた。

「××町……？」と宇三吉はそんな町を知らないといふ風に首を傾けた。

それ切りまた二人とも言葉がなくなつたので、どちらが先にともなしに、その場に蹲んでしまつた。目の前の、狹い掘割を越した向うは、大阪第一の繁華な町である、道頓堀筋に軒を並べてゐる家々の裏側になる譯だつた。此方から見ると、どの家も地下室があるので、三階以上の家だつた。眞正面に見える裏側の家は寫眞屋らしかつた。それだけが毛色の變つた家で、その兩隣の七八軒は同じ大きさの同じ構への芝居茶屋だつた。その芝居茶屋の盡きた所は、赤や青の色硝子の嵌まつた、その硝子越しに見た樣子では、うどん屋であるらしかつた。とある一軒の芝居茶屋の座敷では、數人の男女の食事をしてゐる樣が、障子が開けつ放しになつてゐるので、手に取るやうに眺められた。彼等の笑つたり話したりしてゐる聲の響が、掘割に水の上を渡つて聞えさへした。さうだ、うどん屋だ、數組の客が色硝子の加減で、或客は赤色に見えたり、他の客は青色に見えたり、或は半分赤色半分青色に見え

たりする中に、客の注文を聞いて、それを料理場に傳へる呼び子の聲が聞えるのだつた。

かと思ふと、それ等の向う岸の家と家との或切れ目の間から、少しばかり幕を開いた芝居の舞臺でも見るやうに、賑かな道頓堀の雜踏が覗かれるのである。家々の屋根の上には芝居小屋の櫓も見えるのである。家と家との間の切り取られた道頓堀の通を、東から西から、祭のやうに大勢の人々が歩いてゐる。

「賑かだすな、」と見とれてゐた私が思はず溜息を吐いていつた。

「……あんたの前にゐなはつた所はもつと寂しいところだんの？」と宇三吉が聞いた。

「えゝ。」

「うちが元ゐたとこも寂しいところだしたで……姉ちやんがお花に行つて歸つて來ると、いつも水道場のところにまめだがゐましてんで、」と宇三吉はいつた。そんなにお喋りではないが、彼は私よりもよく話して、そして話振りに人懷しいところがあつた。『姉ちやんがお花に行く』といふ言葉はその時私に分らなかつたが、藝者が座敷に行くことだつたのである。後で聞いたところに依ると、宇三吉の家は半年程前まで、つい近くの鍛冶屋町といふところの、稻荷神社の裏手の路地にゐたのださうである。

私は又しばらく言葉の切れてゐた間、川向うの家と家との間に切り取られた道頓堀の雜踏を眺めてゐるうちに、以前山の手の家にゐる時分、祖母に連れられて、車に乘つてよく千日前に遊びに來たことがあるのを思ひ出した。千日前は道頓堀と同じ所ではなかつたかしら？　と思つて、

「千日前近うおまんの？」と宇三吉に聞いて見た。

「えゝ、直そこだすがな、」と彼は斜め右の方角を指ざして見せた。

多分それは日の暮時分だつた。やがて私たちが歸らうとして立ち上つた時、

「あんたの家どこだす？」と私が聞くと、

「あんたの家の向ひだすがな、」と宇三吉は笑つて答へた。

宇三吉との交際の初に就いては、私はこれだけのことしか覺えてゐない。が、いつとなしに外の誰よりも私は彼と一番親しくなつた。それには、彼の家と私の家が向ひ同士であつたことがその原因の一つだらうが、そればかりでなく大勢の同年輩の子供友達の中で私は彼と一番うまが合つて、お互に好きだつた。考へて見ると、悧巧なことも彼が一番だつたかも知れない。唯、どういふ譯だつたか、外の子供たちは皆それ〳〵子供同士の親し味のあるぞんざいな言葉を使ひ合つてゐたにも拘らず、私だけは誰とでも大人の使ふやうな叮嚀な言葉を改めなかつた。一番親しい宇三吉との間でもさうだつ

た。これは私の性質が內氣で固苦しかつた爲に違ひない。その證據に、今でも私はこの言葉の點でのこだはりから解放されない、餘程古い友達とか、或は附合ひ初の時に拍子よく親しい言葉が出るとかした友達の外は、一旦さういふ他所行きの言葉で附き合ふと、どうしてもそれが改められない。だから、宇三吉の方でも外の友達と違つて、私とだけはいつ迄も最初の時と同じ言葉遣ひを改めなかつた。それからもう一つ、他の友達仲間は皆子供流に宇三ちやんとか、貞ちやんとかいふ名前で呼び合つてゐたが、私だけはいつでも『加部さん』と姓を呼ばれた。

宗右衞門町に越して來てから私が一番困つたのは毎日の學校通ひだつた。といふのは、そこから偕行社迄たつぷり一里以上あつたからである。無論、電車などのない時分だつた。この道の遠さには私は餘程閉口したと見えて、今でもその時の辛かつた感じを覺えてゐる。もつとも身體も人一倍弱かつたからであらうが、冬の朝は寒さで手が冷えて困つた。それに、十歲位の時分だつたから馬鹿々々しいことを眞面目に考へたものである。一例を擧げると、樂隊の小太鼓を叩く人はよく太鼓を肩から紐に依つて腹の邊にぶら下げてゐるが、あんな風に火鉢を腹の前にぶら下げて、町を歩いても可笑しくないやうには流行らないものかなどと考へた。それから又、私はその頃から腸が惡かつたと見えて、よく道を歩いてゐる時に便を催した。その例は小さな時分に一度腹を惡くして、學校から歸りに洋服のズボンの中へ龐相してしまつたことがある位だ。自然、小便も近かつた。だから、その一里の道を學校への往復の途で屹度用を足したくなつたらしい。それには先の火鉢よりもつと馬鹿げたことを考へたことを覺えてゐる。それは各々自分の家の便所に通じてゐるホースを尻にくつつけて歩いたらどうかといふことである。さうしたら道を歩いてゐる最中にでも、隨意に大便でも小便でも出來て便利だらうと眞面目に毎日考へたものだ。これは學校の往復の途といつたが、かういふことを考へるのはいつでも行く時の朝の道だつたやうである。ホースも自分だけがやつたら見つともないが、一般の人がやればいゝ譯だと考へたが、ふと、二里も三里も遠くへ行く人だと、餘程長いホースが入る譯だし、そんなに大勢の人がホースをつけて歩いたら、町がその爲に歩けなくなるだらう、それは馱目な考へだと思つて止めた。

も一つ困つたのは、先にいつた偕行社といふ風變りな學校の生徒である爲だつた。さういふどちらかといふと貴族趣味の學校だつたので、一般の學校の生徒たちから偕行社は反感を持たれてゐた。まつたく七歲や八歲から、兵隊と同じ型の帽子を被り、同じ服裝をして、背囊など背負つてゐるのだから、大人の目には何でもないだらうが、不斷着の和服に、袴さへ穿いてゐるものゝ少なかつた當時の大阪の小學生たちの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.